歯科補綴学第2講座 大学院歯学研究科2年
北村万里子 きたむらまりこ

仲の良い仲間たちがいる、おもしろい研究がある、補綴は楽しいところです

自分の研究が役に立つというよろこび

補綴（ほてつ）という言葉はあまりなじみがないかもしれませんが、差し歯や入れ歯、インプラントなど、歯を治療することを言います。

北村さんは補綴学の中でも「顎運動」つまり咬合（こうごう=かみ合わせ）、特に歯ぎしり（ブラキシズム）とあごの関節の動きが、顎関節症などにどのように関係しているか、といったことについて研究しています。

顎関節症とは、あごの関節に痛みがある、開けにくい、音がするというような症状の出る病気で、大学病院に初めて治療に訪れる人の10%がこの顎関節症だそうです。その原因はいろいろな要素がありますが、そのひとつと考えられているのが歯ぎしりです。「歯ぎしりの時、歯にかかる力は自分の体重ほどもあることがあるんですよ。ですから顎関節症にも大きな影響があると思います。私の研究が顎関節症の治療に少しでも役立てばうれしいです」

自分で使う装置は自分で作るおもしろさ

まだ勉強は始まったばかりですが、北村さんには研究を始める前に大きな難関があります。それは顎運動を測定する装置を自分で作らなければならないということです。

これは研究室の伝統のようなもので、先輩たちも自分で使う装置を自分で作り、それを後輩たちに伝えてきました。後輩はそれを受け継ぎ、さらに使いやすく小型化するために改良を加えていっているのです。既製品にはない現場でのニーズにあった装置です。顎運動を測定するためには、被験者の口の中にセンサーを入れなければなりません。

さらに北村さんの研究は、寝ているときの歯ぎしりを測定するために、装置は小型であればあるほど被験者に負担をかけないということになります。

「でも、はんだごても持ったことがないんですよ。うまくできるかどうか心配ですが、先生方に指導していただきながら、研究室の仲間と協力して作ります。早くからなければいけないんですが、なかなか踏み切れなくて」

と、まるで工学部のような作業に少しとまどいながら、装置の部品や材料を集めていました。

優しい先生と素敵な仲間がいる楽しさ

顎関節症には精神面での治療も効果的だそうです。北村さんも患者さんの話をよく聞いて、リラクゼーションの指導をしたり、姿勢を正すことをすすめたりしているそうです。以前、茶道部に籍を置いていたことがあり、そんなことも役に立っているのかもしれませんね。

ふだんでも大学にいることの方が多いという北村さん。神戸市の出身ですが、徳島はとても住みやすいそうです。

「でもどこへ行くのも車がないと不便ですね。免許は持っているんですが車がなくて。ですからどこでも自転車で行きます」

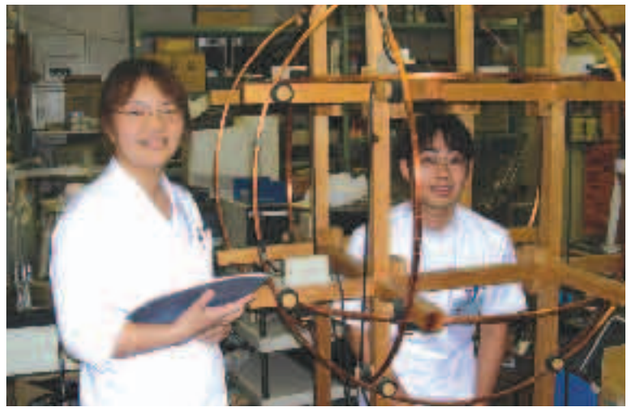
世界的に有名な坂東永一教授や中野雅徳助教授が担当する研究室には現在大学院生は、北村さんと石川君の二人です。

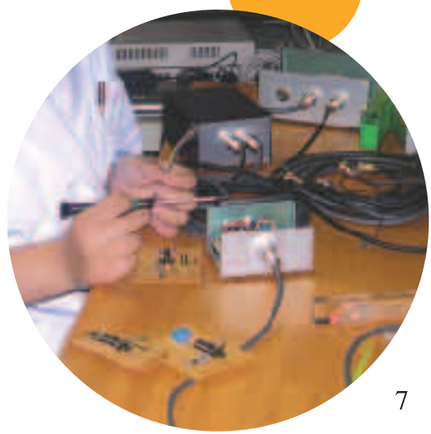
「第2補綴は少ないんです。ちょっと敷居が高い感じがするんでしょうか。それとも先生方が恐そうに見えるのかも（笑）。でも実際はとても気さくで優しい方ばかりなんですよ。おもしろい研究もたくさんありますから、ぜひ補綴に来てくださいね。とても仲が良くてアットホームな雰囲気です。みんなでバーベキューなどアウトドアを楽しむこともあります。先生方も家族連れで参加してくださるんですよ」

とアピール。

「将来も今の研究を続けていきたいです。でも今は早く装置を作らなければ」（笑）

はたして本誌が発行されるころには完成しているでしょうか？





Mari Kitamura